Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

自主シンポジウム 5

乳幼児保育における発達援助の専門性
── 質の向上へ向けての個別的・具体的援助のあり方 ──

企画者： 日本発達心理学会発達障害分科会
秦野悦子(川村学園女子大学)・金谷京子(鹿児島短期大学)・本郷一夫(東北大学)
司会者： 秦野悦子(川村学園女子大学)
話題提供者： 宍戸栄美 (光明幼稚園)
武野利恵子 (川崎市立 平間保育園)
刑部育子 (川村学園女子大学)
指定討論者： 金田利子 (静岡大学)
本郷一夫 (東北大学)

企画趣旨:

保育の場に求められる内容が多様化してきている。私たちはこれまで第50回日本保育学会、第39回日本教育学会、第51回日本保育学会でのシンポジウムを通して「乳幼児保育における発達援助の専門性」について討論を重ねてきた。

具体的には(1)保育の場における「発達」とは何か、(2)保育の場において実際にどんな援助が可能なのか、(3)子どもの発達を援助する人々との「専門性」とは何かを中心に議論が深められてきた。育児支援、発達援助についての総括的な一般論に関する議論を経て、さらにこの問題を論究していくためには、個別的で具体的な援助の質をどのように高めていく事が可能なのかに焦点が移りつつあるように思われる。

そこで今回のシンポジウムでは、各話題提供者が、各々の立場で関わっている保育実践をベースに、個別的･具体的な援助の質を高めていく方向へ向けての話題提供を行う。そこでの共通テーマは、現幼稚園教育要領にある「一人一人の特性に応じた保育」をどう展開するかであり、その時に個と集団の関係をどのようにバランスをとってやっているかも焦点となる。

シンポジウム全体としては、対象を障害児に限定せず、発達の幅に応じるにはどうしたら良いか、個人差や個性に対応するにはどうしたら良いかを具体的に考えていきたい。

発達援助のあり方を見直す：ＫＪ法の試み
（ 宍戸栄美 ）

保育の質を向上させるためには、当然、自身の保育の質の見直し作業が不可欠である。さらに保育者同士が経験を出し合い積み重ねていくことが大切なことは言うまでもない。

ところが、いざ中身にまで迫って伝えあい、経験を深めたり、役立てたりしようとすると、なかなか難しいのも事実である。その難しさを作り出しているものとして、(1)保育は個別性が強く一般化することが難しい、(2)保育者は自分自身の行動を意識化することが難しい、(3)保育は完成したものを一方的に子どもに与えていくのではなく、子どもとともにつむぎ合わせていく性格を強く持っている、(4)保育の中身は雑多な事象が絡み合って成り立っているため、どのファクターが子ども強く影響を与えているかが判断つきにくい、等々が考えられる。これらの困難さを踏まえた上で尚、一部であっても伝え合うことのできる部分はないかと考えてみた。

ひとつの試みとしてＫＪ法を用いて、自閉的傾向を持つＡ君へのブランコ場面での働きかけについて記述し、構造化してみた(配布資料参照)。

ＫＪ法を試みて良かったと思われる点は、（１）具体的な事実が積み重ねられ残っていくので、抽象化した時に裏付けとなる事実の基に了解できる、（２）自分の行動を反芻してみる事によって意識化できる、（３）構造化することによって自分のとった行動の意味を改めて整理し直せる、（４）既成の構造に事実をふりわけるのでなく、事実を出発点としているので、とらわれることなく見直せる、（５）俯瞰することによって、ばらばらだと思っていた事柄の関係に気づける、等があげられる。一方で不満が残った点は、（１）時間の流れを表現しきれない、（２）場面を切り取らざるを得ないので、周辺で起こっていることを切り捨てざるを得ない、等であった。

できあがった図表を見直す時、複雑だと思われていたものの中にも案外シンプルに集約できることもあると気づかされた。一方で、どの事実を再現するにしても、どういうタイミングで、どういう条件の基で、どんな風に使っていくかは、その時々の判断に委ねるし

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

かないのだという事にも改めて気づかされる。その判断力を培うことが更に深い意味で、援助の質を向上させることになると思う。「保育者の勘」とでも表現される、判断のためのキーと成る事実を整理し直し、伝えあうことも今後の大きな課題であると思われる。

障害を持つ子どもが複数いるクラスの保育運営

（武野利恵子）

発達の遅れが著しい子どもの保育園での受け入れは基本的には一対一が望ましいと考えられる。昨年度、当保育園で４歳児クラスに双子の障害児（非定型自閉症・精神遅滞）を受け入れ保育を行なってきた実践経過を報告し、障害を持つ子どもが複数いるクラスでの保育運営のあり方について検討していきたい。

（１）受け入れにあたって：双子の障害児がともにことばがなく多動で、人とのやりとりができにくい状態であった。高いところに登ったり、興味のあることは無理やり関わろうとしたりで２人の行動の予測がつけにくいことから保育者は一対一で担当し、個別の援助が必要な時期には可能な限り、園で対応できる最良のことをしてみようとの基本方針をもった。そして４歳児クラス２０名を３人担任で運営するという初めての体制で保育がスタートした。

（２）保育運営：各々の子どもたちを理解し援助の手がかりを探るためには、担任３人が１週間交代でクラスの保育担当と障害児担当として関わることが望ましいと考えた。特定の保育者が障害児を担当すると行き詰まりもあり、子どもの成長を担任相互に確認しあえないこともある。担当を交替するメリットは視点が広がり悩みも喜びも分かち合える、また保育方針も考えあえる力強さもある。

２人の障害児については各々の遊びの観察から始めて、その時に興じている遊びを見守り、その遊びが広がるように遊具の提示や働きかけを行なってきた。また生活リズムが一定せず午睡に入れないので、児が比較的落ちつける廊下にコーナーを作り、そのコーナーを廊下→部屋の入り口→室内と時期に合わせて移動し落ちついて過ごす時間を確保していく試みをした。

３人担任相互のあり方については、遊びの具体的援助は手さぐり状態ながらも、保育者各人の持ち味を生かすことを重視した。担任相互に共通した見解としては、子どもが好きな遊びを極めていくことが、次の発達に向かう原動力となり、生活を充実させる結果につながるという考え方であった。

（３）経過：入園当初は遊びらしきもがなく、１人はマスターベーション、もう１人は園内を歩き回るという状態であった。水や感触などの好きな遊びがでてくると、要求を保母の手をとって示す事もみられるようになった。クラスの保育や他児との関わり意識はみられないが、本児たちの興味ある慣れた歌や遊びをクラス保育に取り入れる中で参加できるように働きかけている。クラスの中での位置づけも一年間で変化がみられたので報告したい。

保育園における

「ちょっと気になる子ども」の参加過程

（刑部育子）

文化人類学者 Lave & Wenger(1991) は、「状況的学習論」を提唱している。彼らによれば、学習や発達は状況に埋め込まれたものだとする。

刑部は一連の研究（1998 et. al）において、このような視点に立ち、保育園の一人の「ちょっと気になる子ども（当時４歳児）」が集団（関係性）の中でどのように参加しているのかを一年に渡る観察記録をもとに分析した。

ここでは、１人の子どもを対象にしながら、その１人の子どもに焦点にあてるのみではなく、むしろ周りの子どもたちからの関わりや保育者の関わり方（状況）を分析の中心としている。その結果、「ちょっと気になる子ども」が気にならなくなる過程で起きていたことは、単に保育者の援助の仕方を変化させた結果であるというよりも、クラス全体の構造的な変化によることが明らかになった。同僚の保育者同士によるケースカンファレンスが、間接的に担任の援助の仕方に影響を与えていたり、対象児と新入園児との周辺的な関わりが始まる」ことによって古くからいる園児との関わり方にも変化が生まれた等、徐々なる構造的変化が連鎖的に起きたのである。諸関係性のダイナミックな変化により、「気になる子ども」をめぐる文脈が変化し、「気になる子ども」として焦点化される必要がなくなっていったのである。

この事例では「気になる子ども」自身が何ができるようになったというよりも、関係性の変容によって、その子どもらしい参加の仕方で参加できるように変化したのだと言えるだろう。今回の発表では、同僚の保育者同士のケースカンファレンスにおいて何が起きていたのか、子ども同士の関わり方が一年の間でどのように変化していったのかを紹介し、子どもが保育活動に参加する発達的意味や、発達援助の専門性についていくつかの提案を行ないたい。

NII-Electronic Library Service